

『伯爵様は不埒なキスがお好き♥伯爵シリーズ1』

著：高月まつり

ill：蔵王大志

そのアパートは「桜荘」といった。  
齢数百年を数える桜の大木を、見上げるように建てられている二階建てのアパート。  
その地域一帯を檀家として抱える道恵寺の敷地内にあり、年季の入った外見から、近所の子供達からは「お化け荘」と呼ばれていた。

小さくて黒い物体が、ほのかな月明かりを浴びて低空飛行している。  
まるで何かを探しているかのように、あっちフラフラ。こっちヨロヨロ。  
どうにか「お目当てのもの」を探し当てたのか、それは一目散に桜荘の一階管理人室を目指した。

桜荘のオーナー兼管理人の比之坂明は「ごちそうさま」と呟いて、ちゃぶ台に箸を置いて、質素な夕食を終えた。

その時。  
何かがいきなり窓ガラスにぶち当たった。  
今夜は涼しいからと、エアコンをつけずに窓を開けていたから、光に誘われて虫でもぶつかったのだらうと、明は立ち上がって窓の外を確認する。

窓の外には桜の大木があり、そこをねぐらにしている小鳥達もいるはずだ。  
もし怪我をしていたら保護してやりたい。そう思って、明は窓の下を懐中電灯で照らした。

「何か.....動いてるな」

そう。黒い何かは、モゾモゾと哀れっぽく動いていた。

「鳥か？ いや、鳥にしては形が変だ.....」

彼は黒い何かをじっくりと観察した。

ピンと立った小さな耳に、短い毛の生えた胴体。大きさはハムスターぐらいだろうか。

だが、背中にはビラビラとした羽が生えている。

明は右手を伸ばして羽を摘んで持ち上げると、左右に広げた。

「コウモリじゃないか。うわあ、こんな近くで見るのは初めてだな」

明は感激の声を上げるが、コウモリは嫌そうに僅かな足をワキワキと動かす。

「なんか、可愛い」

コウモリが必死に足を動かせば動かすほど踊っているように見え、明は「ぷっ」と嘔き出した。

「コウモリは洞窟の中で群れになってるもんじゃないのか？ どうした？ 迷子にでもなったのか？」

返事がないのを分かっているけど、あまりに可愛らしい仕草を見せられてはつい問いかけてしまう。

「待ってる。今、猫に食われないように隠してやるからな」

明は一旦コウモリを地面に下ろし、玄関へ回って外に出た。

桜の木に猫達は登らない。ここならば安全だろうと、明は、葉が茂っている枝にそっと乗せてやる。

「もう間違えて突っ込んでくるなよ？」

そう言ったのに。

なのにコウモリは再び飛び立ち、明の部屋の窓に激突する。せめて部屋の中に転がり込んでくれれば、窓が割れる心配もいらぬのに。

「なんだってんだ？ お前はー」

明は苦笑しながら、落ちたコウモリをそっと拾い上げた。そして桜の枝に置いてやる。

なのにコウモリは三度、明の部屋の窓に激突した。

それを一体何度繰り返しただろう。

「コウモリってのは、こんなにバカな生き物なのか？」

明はコウモリを手のひらに載せて呆れた声を出した。

「...それとも、どこか怪我をしてるのか？ 腹が減って巢に帰る力がないのか？」

そう言って、明は人差し指でコウモリの頭をそっと撫でてやる。

コウモリはそれが気持ちいいのか、目を瞑って大人しくなった。

「仕方ない。俺の部屋に入れてやる。一晩だけだからな？ ちゃんと回復させて自分の巢に戻れよ？」

明がそう言った途端、コウモリは目を開いて何度も頷いた。いや、動物に人間の言葉が分かるはずないから、多分、目の錯覚だ。

コウモリを持って部屋に戻り、慎重にちゃぶ台の上に乗せる。

「ところで.....何を食うんだろう」

キャベツか？ レタスか？ ...いや、こいつは鳥じゃないからなあ....。

明は首を捻る。が、何かを思い出したのか、ポンと手を打った。

「そういえばテレビの旅行番組で、果物しか食べないっていうコウモリのスープを飲んでたレポーターがいたな...」

それはそれで特殊なコウモリなのだが、何を食べるのか今ひとつ思い浮かばない明は、冷蔵庫からスイカを一切れ持ってくると、コウモリの前に置く。

だがコウモリは、食べようとしな。ころなしか、そっぽを向いたように見える。

人が見ていたり、明るい場所では食べないのかもしれない。

そう思った明は、部屋の隅に転がっていたティッシュケースを掴み、中身を半分ほど抜いて、その中にコウモリとスイカを入れた。

その上から、ハンカチを被せてやる。

「これでよし、と」

明は、コウモリ入りのティッシュケースをちゃぶ台の下に置き、満足げに微笑んだ。

翌朝。

目覚ましと共に起きた明は、布団を畳んで押し入れにしまった後、ちゃぶ台の下のティッシュケースを引っ張り出した。

「生きてるか？ おい、コウモリ」

話しかけながら、そっとハンカチを取る。

コウモリはティッシュの布団の上で、スイカまみれになっていた。

「お前、凄い姿になってるぞ？」

笑いながら人差し指で触ってやると、コウモリはモゾモゾと動き出す。

「このままだと臭くなるから、拭いてやる」

明はそう言って、コウモリをティッシュケースから引っ張り出した。

濡れタオルで体を拭いてもらったコウモリは、大人しくちゃぶ台の上に乗っている。

「は一、さっぱりした」

朝風呂と身支度を済ませた明は、コウモリの顔を覗き込んで呟いた。

「お前、今夜こそ自分の巣に帰れよ？ ここは人間の住む場所なんだから」

コウモリは、「ここにいたいんだけど」と言うようにモゾモゾと動き、彼に尻を見せる。

可愛い。凄く可愛い。

図体が大きなわりに小さなものが好きな明は、手のひらサイズのコウモリを見つめ、楽しそうにニコニコと微笑んだ。

真夏の太陽は、ここが稼ぎ時と言わんばかりに燦々と大地を照りつける。

桜の巨木が作る日陰の下、明はタンクトップにジーンズという恰好で、庭いじりに精を出していた。

スコップを使った豪快な作業は、ガーデニングというより造園だ。

祖父が生前遺した花壇に水をやり、雑草や小石を取り除く。

地味な作業だが、土に触れることが好きな彼にとって、「庭いじり」は既に趣味となっている。

花壇の横には、ヘチマと朝顔が同じ棚に蔓を絡ませ、仲良く同居していた。

南国ではヘチマを食べる習慣があるそうだが、どう料理していいかわからない明はヘチマ水を取ろうと思っていた。食べる代わりに肌に塗るのだが、肌がスベスベになるより腹一杯になる方が、男として嬉しい。

だから、「来年はナスとトマトとキュウリを植えよう」と心に決めた。

幸い土は、祖父の手入れのお陰で肥えている。

さぞかし立派な野菜ができるだろう。

明はゆっくり立ち上がると、額に浮いた汗を手の甲で拭った。

桜に止まった蝉が、境内から聞こえてくる蝉時雨に應えるように、盛大に鳴き始める。

「新盆、なんだよな...」

寂しそうに呟いた彼の足元に、何か肌色の生き物が動いていた。

「土が肥えていると、ミミズも肥えてるなあ」

彼は自分で言った台詞に、「あ！」と閃き、土で汚れた手をポンと叩く。

一人暮らしの部屋に迷い込んできた、小さな同居人。

明は、彼のためにミミズを何匹も掴まえた。

午前中に手のひらいっぱいミミズを掴まえて、一旦休憩。

町内会役員が持ってきた回覧用紙を、階段横の掲示板の目立つところに留めたところで簡単な昼食。

コウモリは、ちゃぶ台の下にぺたりと転がったまま寝ているようだ。小さな体が呼吸で上下していた。

「やっぱり可愛い。.....飼って大丈夫か？ 懐けばいいんだけど」

明は指を伸ばしてコウモリの背中に触れ、潰さないよう慎重に撫でる。  
時折ピクピク動くが、夢でも見ているのだろうか。  
だが明は、「そんなわけあるか」と、自分の考えに笑った。  
「さて。さっさと廊下の掃除だ」  
彼は首にタオルを巻くと、コウモリを起こさないよう静かに部屋を出た。

「ただいま?、比之坂さん」

「何やってんですか?」

二〇三号室曾我部と二〇四号室伊勢崎が、ヘチマ棚の前でしゃがみ込んでいる明の背中に声をかける。  
彼らは桜荘で知り合って意気投合したらしく、いくつものバイトを掛け持ちして金を稼いでは、海外へ貧乏旅行に行っているのだ。

年は明より三つ若い二十一歳。茶髪にピアス、ルーズな服装だが、礼儀は大変よい。

「おかえりなさいっ! ミミズを捕ってんだ」

明は立ち上がり、ボウルに山ほど入っているミミズを二人に見せる。

「うっ!」

「げっ!」

夕暮れとはいえ、気温はまだ高い。そんな折り、快適な土の中から掘り起こされたミミズは、「勘弁してよね!」と抗議するように動いていた。

二人は気持ち悪さに一歩退くと、揃って「釣りにでも行くんですか?」と訊ねる。

「いや、これはコウモリの餌。夕べ、窓にぶつかって大変だったから、保護したんだ」

コウモリはミミズを食べるのだろうか?

曾我部と伊勢崎はそう思ったが、明が楽しそうに「餌」を連呼するので、突っ込みは心の中で留めておいた。

「でもそれ、二〇一の安倍さんに見せたらびっくりして倒れるかも」

「うん。俺もそう思います。女の子は、こういうのに弱いから」

男でも、ボウルいっぱいミミズには驚きます、管理人さん。

彼らは心の中でこっそり呟き、苦笑する。

「それは俺にも分かる。余ったら土に帰してやるよ」

明はニッコリ笑ってそう言うと、鼻歌交じりに部屋に戻った。

「コウモリって、どんな種類のコウモリだと思う? 曾我部」

「.....夕べ、だって? 夕べって言ったらさあ」

曾我部は神妙な顔で伊勢崎を見つめる。

「何か、物凄いことが起きそう」

「俺もそんな気がする」

「旅行行くの、もう少し先に延ばそ? な?」

「俺も今、そう言おうかと思ってた」

二人は顔を見合わせて深く頷き、一階端にある管理人室に視線を移した。

「おい、コウモリ。メシだぞ、メシ」

窓は半分ほど開けていたが、南向きのせいで部屋の中は大変蒸し暑かった。

「あつっ」

明は玄関先にミミズ入りボウルを置いて灯りをつけると、すぐさま窓を閉めてエアコンをつける。

そして、ちゃぶ台の下に隠れていたコウモリを片手で掴んだ。

「おい。コウモリ」

だがコウモリは暑さのせいでぐったりしている。餌兼水分補給のスイカのかげらは、結構な大きさにもかかわらず、萎びていた。ヤバイ。これはヤバイ。

飼った生き物を死なせたくない明は、急いで冷蔵庫の中から新しいスイカを取り出し、その上にコウモリを載せる。

「死ぬなよ、頼むから死ぬな? 俺は花壇に『コウモリの墓』なんて建てたくないぞ?」

明は頬を引きつらせながら、コウモリの頭をちょんちょんとつついた。

五分ほど経ただろうか。

コウモリは、ピクリと羽を動かしたかと思うと、物凄い勢いでスイカに顔を埋める。

「よかった。.....生きてた」

明は旨そうにスイカの汁を吸っているコウモリを見つめ、安堵のため息をついた。

「待ってろ。今タンパク質を持ってきてやる」

一心不乱にスイカにしがみついているコウモリをその場に置き、明は玄関先からミミズの入ったボウルを持ってくる。

「たくさん捕ってやったから、好きなだけ食え」  
さすがに、ミミズ入りのボウルはちゃぶ台の上に置けない。

明は新聞紙を敷いた畳の上に、それを置いた。

物凄い勢いで水分補給をしたコウモリは、「もう腹一杯」とばかりに、小さく羽を動かしてスイカから離れる。

「自分で食えないなら、食わせてやろうか？」

明はコウモリの首根っこを優しく掴んだ。コウモリは滅茶苦茶にもがきながら、明から逃げようとする。

「お。随分元気がよくなったな。よーし。腹一杯食えよ？」

彼は嬉しそうに微笑んで、コウモリをボウルの中に.....。

「てめえっ！ やっていいことと悪いことの区別もつかねえのか—————っ？」

入れようとして、物凄い剣幕で怒られた。

「え...？」

今、怒鳴ったのは一体誰だろう。声は男。だがこの部屋には、自分以外は誰もいない。

明はキョロキョロと周りを見回す。

「馬鹿野郎。今、怒鳴ったのは俺だ。俺様だっ！」

ガラの悪い声は、コウモリを掴んだ明の右手から聞こえた。

「ま、まさか.....コウモリが人間の言葉を話すはずは.....」

明は恐る恐る視線をコウモリに移す。

「だから、さっきから俺だと言ってんだろが！ お前、鈍いなっ！」

コウモリは、明を見上げながら悪態をついた。

その瞬間、明は顔を強ばらせて、物凄い勢いでコウモリを部屋の隅に投げ飛ばす。

哀れコウモリは、年季の入った砂壁に激突。

「コウモリが.....しゃべった.....」

インコやオウム、九官鳥は人の言葉を覚えて喋るが、コウモリが人語を話すなど聞いたことはない。第一コウモリは鳥ではない。

「.....ってえっ！」

コウモリは、モゾモゾとこっちに向かって這いながら文句を言った。

幼い頃から、今は亡き祖父に体と精神を鍛えられた明だが、こんな得体の知れない物の前では冷静でいられない。

とにかく逃げなければ。この化け物から逃げなければ。そう思えば思うほど足がもつれる。

「くそっ！」

ちゃぶ台に片手を付いて立ち上がろうとした彼は、気ばかり焦ったせいで盛大に転んでしまった。

「あたっ！」

ちゃぶ台の端に額を強く打ち付けたらしく、皮膚が切れて血が滲む。

血の臭いは、エアコンの冷風に乗って部屋に充満した。

「勿体ねえことすんな！」

コウモリは大声を上げると、明の目の前で正体を現す。

明は瞬きをする間もなかった。

小さな黒い物体がいた場所に立っている、黒い正装姿の長身の男。

絹のようなさらりとした黒髪に、深い海のような青色の瞳。日本人にしては彫りの深い顔立ちだが、バタ臭さを感じない。

そして明には、分かったことが一つだけあった。

綺麗な顔。

ボキャブラリーの少ない彼はこういう風にしか思えないが、大学在学中に小説家になった友人なら、紙面が光って見えないくらい煌びやかな表現で、コウモリ男を賛美したことだろう。

それくらい、明の目の前に立った男は美形だった。

明は血の滲む額を片手で押さえ、逃げ出すことも忘れてポカンと口を開けた。

「いつまでそんな間抜け面してんだ？ いい男が台無しだぞ？ おい」

外見だけなら「どこぞの若様」だが、口調が悪い。

「勿体ねえって言ってんだろ？」

彼は、明の前に片膝をついて額を押さええていた手を掴んで離すと、血の滲んだ傷口を舐めだした。

「な、何をして.....」

自分でも、間抜けなことを言ってると思う。

だが、頭が真っ白になった明は、こんなことしか言えなかった。

「食事」

「は？」

彼は名残惜しそうに額の傷から唇を離すと、明の顔を見つめて微笑む。

女性が十人いたら、その全員が「もうどうにでもして」と、うっとり頬を染めてしまうに違いない魅力的な微笑み。

明は女性ではないのだが、それでも、思わず頬を染めてしまう。

どんなに綺麗でも相手はコウモリ。

今、俺に微笑みかけているのはコウモリ。コウモリだぞ？ 比之坂明っ！

人の体をベタベタと触りながら「これくらい立派だと、食べ甲斐がある」と呟いている彼に、明の頭の中で危険信号が鳴り響いた。

彼がどうやって明を食おうとしているのかは定かではないが、若い身空であの世になど行きたくない。そうになったら、誰が祖父と両親の菩提を弔うのだ。

また、「化け物に食われました」となったら、怪しげな事件として後々までワイドショーにネタを提供してしまうだろう。

そんなこと、まっぴらだ！

明は心の中でシャウトすると、驚きで強ばっている体を「さっさと動け」と叱咤する。

「こんな旨い餌には、今までお目にかかったことねえ。それに、この顔」

彼は明の顔をじっと見つめ、「俺って相変わらず趣味がいいよな」と自画自賛した。

「は？ 俺の顔がなんだって...？」

「少し目元が鋭いが、こういうのを凛々しい顔って言うんだよなあ。形のいいきりりとした眉に、大きすぎない目。高すぎず低すぎない鼻に、少し薄目の唇。いいパーツが揃ってる。お前をここまで男前に作ってくれた両親に感謝しろよ？ 俺は感謝してやる。ありがとう」

容姿で損をしたことはないが、ここまで誉められたこともない。

明は頬を引きつらせて、この男が何をどうしたいのか必死に考えた。

「俺が何かにここまで感謝するなんて滅多にねえ。ありがたく、大人しく食われろ」

彼は低い声で囁くと、おもむろに明の首筋に顔を埋めようとしたところで、横っ面を殴られて畳に転がった。

「てめえっ！ いてえじゃねえかっ！」

彼はすぐさま起き上がると、赤くなった左頬を片手で押さえたまま怒鳴る。

「さすがは化け物と言ってやる。俺に殴られて、すぐ起き上がった人間はいない」

腕を動かしたお陰で他の部分もどうにか動くようになったらしい。明はゆっくり立ち上がり構えると、間を取った。

「もしかしてお前、俺の眼力が通じねえのか？」

「眼力だかなんだが知らないが、俺がこのまま黙って化け物に食われるかっ！」

「俺が化け物だと？」

「それ以外に何があるっ！」

一歩前に出た彼に、明は一歩下がって攻撃の際を窺う。

最初は「逃げるが勝ち」と思っていたが、相手の「大人しく食われろ」という台詞に、明の闘争心に火がついた。

誰が大人しく食われてなどやるものかっ！

腕に覚えのある明は、コウモリ男をボコボコにして動けなくなったところで道恵寺から聖涼を呼び、念仏を唱えて石ころにでも封じ込めてもらおうと思っていた。

道恵寺は悪霊退散系で有名な寺なのだ。

「そこの下等な魔物と一緒にされちゃ困るんだな」

彼は偉そうに腕を組み、不敵な笑みを浮かべる。

「化け物は化け物だろうがっ！」

「はっ！ これだから無知な人間は」

「化け物が人間に説教するなっ！」

「クレイヴン伯」

「は？」

こいつは何を言ってるんだ？

明は眉を顰めて彼を見た。

「俺はクレイヴン伯エドワード。普通、餌にはわざわざ名乗ったりしないが、お前は旨い餌だから特別に教えてやる。そして、エディ、と、愛称で呼ぶことを許そう」

「俺には比之坂明って名前がある！ 餌呼ばわりするなっ！」

「怒鳴ってられるのも今のうちだ。お前の血をたっぷり吸ってやる」

「お前、もしかして.....吸血鬼？」

「『お前』じゃなく『エディ』だったの。今頃気づくな、バカ」

「初めて見た。映画の中だけの化け物じゃなかったのか？」

明はエディを上から下までじっくり見ると、「吸血鬼なんて、この世にいたんだな」と感心した。

「そんなに珍しいのか？」

「珍しいというか、普通は存在しないもんだろが」

「吸血鬼は特別な存在だからな。普通とは違う」

「いや、だから、そういう問題じゃなく」

「存在するんだから仕方ねえだろ」

「まあ、そうかもしれないが……」

最初の緊張感はどこへやら。

エディと明は友人同士のような会話になった。

「とにかく俺は今、猛烈に腹が減ってる」

「だったらコウモリになってミミズを食え、ミミズを。活きがいいぞ」

明は、ミミズの入ったボウルを指さす。

「このバカ。何で俺が、ミミズなんて薄気味悪いもんを食わなくちゃならねえんだっ！ まだスイカの方がましだぞっ！」

エディは頬を引きつらせた。

「ならスイカを食えっ！ 冷蔵庫に入ってるから、特別にタダで食わせてやるっ！」

「水分だけ取って、腹がふくれるかってんだっ！」

エディは明に掴みかかろうとしたが咄嗟に逃げられ、逆に蹴りを食らう。

「ぐっ！」

「女を相手にするのは訳が違うってこと、教えてやる！」

映画の中の吸血鬼は、いつでもどこでも「華奢な美女」か「儂げな美女」を毒牙にかけていた。だが明は、立派な体格をした男だ。しかも腕っ節が強い。

「ちっ。だったら俺も本気を出してやる」

エディの瞳が、青色から深紅に変わった。

やばっ！

明は素早く両手で頭をガードすると、左に避ける。

「人間にしては、反射神経がいい」

エディは砂壁に右腕をめり込ませ、そのままやけに発達した犬歯を見せてニヤリと笑った。

「このバカカっ！ ここは俺のアパートだぞっ！ 壊すなっ！」

「大人しく俺に食われねえお前が悪い」

「腹が減ってるなら、別の人間を食えっ！ 吸血鬼には美女の生き血だろっ！ 男の血を吸って嬉しいかっ！」

明はエディの足を払い、彼が倒れる瞬間、再び脇腹に蹴りを入れる。

「旨い血だったら、男も女も関係ねえっ！ それに俺は、そういうことにこだわるたちじゃねえんだっての！」

エディの拳を間髪で避けながら、明は心の中で舌打ちした。

この化け物、信じられないくらいタフだ！ 脇腹に俺の蹴りを食らって、平気で攻撃してくるっ！

タフなのは人間ではないからだ。

だがエディも、きっちり応戦する明に心の中で、「いい加減に観念しやがれ！」とシャウトしていた。

彼らは一步も引かず、六畳一間の和室で戦った。

その間、エディが開けた穴が壁に五つ、明が襖に空けた穴が三つ。

明の息が上がってきた。

彼は、額から頬、顎を伝っていく汗を乱暴に拭くと、エディをキッと睨み付ける。

「そろそろ諦めた方がいいんじゃない？ 明ちゃん」

エディは偉そうに言ったが、腹の虫が盛大に鳴り響いてしまいバツの悪い顔をした。

「はっ！ そっちもガス欠か？」

「餌は大人しく食われてろっ！」

「そっちこそ、さっさと自分の国へ帰れっ！」

お互いにこれが最後の攻撃かというところで、相手の顔に自分の拳をめり込ませようとした瞬間。

「管理人さんっ！」

「比之坂さん！ 何かあったんですかっ！」

ドアの向こうから、ノックの音に重なって住人達の声が響いた。

明は腰を落としてエディの拳を避けると、そのまま玄関に向かって走る。

相手は明から多大なるダメージを受けた、腹の減った吸血鬼。数人がかりなら、喧嘩とは縁のない男でもどうにかなる。

全員で押さえつけて、道恵寺へ連れて行けばいいっ！

そう思った明は、物凄い勢いでドアを開けた。

「凄い音が聞こえてきて、俺驚いたよー」

「最近物騒じゃないですか。だから、泥棒と格闘でもしてるのかと……」

「ホント、ホント」

「おでこ、大丈夫……ですか？」

二〇二の作家・河山、一〇二の会社員・大野、一〇三の会社員・橋本、そして二〇一のOL・安倍。

夜のバイトで留守にしている曾我部と伊勢崎を抜かした桜荘の住人が、全員集合して心配そうな表情を浮かべていた。

桜荘紅一点の安倍がいたが、今は躊躇している暇はない。

「あ、ああ！ みんなに頼みが」

「明一！ どうした？ 誰か来たのか？」

「ある」と言い終わる前に、部屋の奥から聞こえてきたフレンドリーな声。

何なんだ？ この、妙に馴れ馴れしい声はっ！

明が頬を引きつらせて眉を顰めたところに、声の主が現れた。

「こんばんは、桜荘のみなさん」

さっきまでダラダラと汗を流し、スラックスからシャツをはみ出させて拳を繰り出していたのはどこの誰やら。エディはすっかり身支度を整えた恰好で、住人を前に優雅に微笑んだ。

この美貌がある限り、食事をする時以外、「力」を使う必要はない。

「綺麗」

安倍は呟いてから、顔を真っ赤にして慌てて手で口を押さえる。

男達もほんのりと頬を染めてしまい、互いに顔を見合わせて苦笑した。

「お、お、お前っ！」

エディは、言葉を続けようとした明を後ろに押しやると、なおも住人に話しかける。

「私の名はエドワード。クレイヴン伯エドワード・ヒュー・キアラン。エディと呼んでください」

「日本語、お上手なんですね…」

「ええ。明の友人であり続けるために、随分と勉強しましたから。ええと、ミス……」

「早紀子。安倍早紀子です。日本へようこそ、エディさん」

「こちらこそよろしくお願ひします、ミス早紀子」

エディは安倍の右手をそっと握り、馴れた仕草で手の甲にキスをした。

「エディさんは、どこの国から来たんですか？」

何でも話のネタにしようと、作家の河山が質問する。

「ユナイテッドキングダム、あ、日本の方にはイギリスと言った方が分かりやすいですね」

物腰優雅で言葉も丁寧。

河山はエディを、上流階級のお坊っちゃんだろうと踏んだ。

「でも、部屋で一体何をしてたんですか？ 物凄い音と大声が聞こえてきましたけど…」

「喧嘩してるみたいな声だったし…」

大野と橋本の疑問はもっともだ。

その音を聞きつけて、他の住人も管理人室に駆けつけたのだから。

「サッカーのビデオを、音声を最大にして見ていたんです。このアパートは古いようだから、音が振動で伝わったんでしょう。それを見ながら、私達は大声で鬨声チームを応援していました。怒声に聞こえたのは、チームを応援する声でしょう」

「そんなことあるのか？」と突っ込みが入りそうな答えだったが、桜荘が古いのは周知の事実なので、住人達は逆に「そうかもな」と納得してしまった。

住人達は、「ビックリしたけど、比之坂さんが無事ならそれでいいか」、「あんまり大きな音で聞いていると、すぐ耳が遠くなっちゃいますよ？」と、笑う。

「お騒がせしました」

頭を下げる仕草まで優雅なエディ。

住人達は、もうすっかり「エディさんは比之坂さんの親友」と思い込んでしまった。

「エディさんはいつまで日本にいらっしゃるんですか？」

「期限は特に定めていません。心ゆくまで日本文化を楽しもうと思っているので」

「そうですか」

安倍はニッコリ微笑んで、何かを納得したように頷く。

「それじゃ、俺達も自分の部屋に引き上げようか？」

「そうだな。比之坂さん、またねー！」

「それじゃエディさん。また明日」

「今度、本場サッカーの話、聞かせてくださいね」

彼らはそう言って、明の部屋を後にする。

ちょっと待ってくれっ！

叫ぼうとした明の前で、ドアは無情にも閉じられた。

「……この化け物。どういうつもりだっ！」

「別に」

「攻め方を変えようと思っただけだ」なんて口が裂けても言えないエディは、犬歯を見せて笑うと、ご丁寧に鍵までかける。

「お前が何をどうしようが、俺は餌になんかならないぞっ！」

「大声を出すな。近所迷惑だ」

「どの口がそんなことを言うんだっ！」

明はエディの胸ぐらを掴むと、目を三角にして怒鳴った。

「お前は、腹を空かせた哀れなコウモリに、餌の一つも与えようと思わねえのか？」

「何だと？」

「『可愛い』と言って、お前は俺の頭を何度も撫でてくれたっけ……」

「う……っ」

確かに明は、コウモリの頭を「よしよし」と撫でた。何度も撫でた。

「遙か海の向こうからこの地に渡った俺の苦勞話を、聞いてみたいと思わねえのか？」

言われてみれば、確かに気になる。

「いきなり襲って血を吸ったりしねえ。だから、俺の話聞いてみる気はねえか？」

「本当に、いきなり襲いかからないか？」

明の瞳が、好奇心に揺らぐ。

エディは「かかった！」と心の中で拳を振り上げた。

「本当だ」

明は警戒しながら、エディから手を離す。

「さて、どこから話してやろうか？」

「その前に」

明は、居間に戻ろうとしたエディの襟首を掴んで言った。

「靴を脱げ。お前は土足のまま、人の部屋で俺と大立ち回りをしたんだ。まずは畳を綺麗に拭け」

三十分後。

壁や襖は穴が空いたままだが、畳はどうか綺麗になった。

明はエディにスイカ、自分に麦茶を用意して、あぐらをかく。

正座をすることもあぐらをかくこともできないエディは、ごろりと横になった。

「化け物のクセに凶々しい」

「それなら明日、椅子を買ってこい、椅子を。そしたら、手を膝の上に置いて行儀よく座ってやる」

「明日までいる気かよ」

「心ゆくまでいると言ったのを聞いてなかったのか？」

「お前が勝手に言っただけだ」

「……俺の目の前にいるのは、コウモリの俺を看病してくれた明と同一人物か？ こういうのを、日本では血も涙もないと言うんだよな」

「俺に血がないなら、ここにいる必要もないな？ 話をしたらさっさと夜空に飛んでいけ」

ああ言えばこう言う。

エディはムツとした表情でスイカに手を伸ばし、一口嚙った。

「で？ どんな苦勞話があるんだ？ クレイヴン伯エドワード」

「んー、そうだなあ。どっから話をすりゃいいかな。やっぱ、日本に渡ることになっただいさつからか？ お前はどっから聞いてえ？」

「お前、伯爵のくせに言葉遣いが悪いな」

麦茶を飲みながらの明の突っ込みに、エディはさらりと言い返す。

「若い人間達の口調を参考にしたらじゃねえの？ 結構気に入ってんだけど、この口調」

「あ、そう」

明はおざなりに返事をする、「早く話せ」とエディを急かした。

「同族の舞踏会を城でした時のことだ。最初は、『どの地域の間人が一番旨いか』で盛り上がって。けどそのうち、仲間の一人が『遙か東の外れに小さな島国があり、丸々肥えた人間がウジャウジャいるらしい』つつ一話を始めてだな…」

「それが日本のことか」

「ああ。俺も昔、極東にジパングと呼ばれる黄金郷があるって話を、何かの本で読んだことがあったけど、その時はあまり気にしなかった」

「つまり、黄金郷には興味は湧かないが、丸々肥えた人間には興味が湧いたと」

「当然だっつての。俺様は吸血鬼、人間達は餌だ」

エディは再びスイカを嚙り、話を進める。  
とにかく、「極東の島国」に興味を湧いたエディは、数日のうちに支度を整えて仲間と共に出航した。  
エディ達は、「乗組員は人間だし、途中でお腹が空いたら食べちゃうかもしれない。そしたら誰が船を動かす？」ということで、現地に到着するまで棺桶の中で眠っていることにした。  
今思えば、これがよくなかったのだろう。  
海はいつでも凪いでいるわけではない。  
船は運悪く大嵐に見舞われ大破。  
エディの入った棺桶は、波間を漂流。仲間の棺桶ともはぐれてしまった。  
棺桶は漂流の末、東南アジアの貨物船に引き上げられた。  
船員達は蓋を開けて中を確かめようとしたが、どんな道具を使っても棺桶に傷一つつけることができず、古物商に売り払った。  
その古物商は古物商で、日本から買い付けにやってきた古物商に、「これはさる貴族が作った物で」と、勿体ぶった理由をつけて売った。  
そして日本の古物商は、新しくオープンさせるアンティークショップのウィンドウディスプレイにしようと、倉庫で厳重に保管した。  
「それが、今から十年前のことだ。ちっと寝過ぎたらしい。けど、すっげー腹が減って、さすがの俺も目が覚めた」  
「何百年も棺桶の中で寝てたのか？」  
「ああ」  
「年、取らないのか？」  
「バカかお前。人間と一緒にするな。俺達の一族は老いない。成人したら、その時の姿のまま生きる。ただ、あんまり血を吸わない時期が長いと、皺が目立ってくるけどな」  
「じゃあ、十年前に起きた時は...」  
「おう。結構皺くちや。ソッコーで五人ほど食った。腹が減ってたから、そこそ旨かった」  
「こ、殺したのか？」  
「まさか！ 餌の血を吸って片っ端から殺しまくったら、増えねえだろ？ たくさんの餌から、『ちょっと貧血かな？』って程度の血を吸って回る。そうすりゃ、餌は死なずに適当に増えていく」  
バカにしたような顔のエディに、明はムツとしながらも「牛から牛乳を絞るようなものか。……って、に人間は家畜じゃない」と尋ねた。  
「どこが違うんだ？ どっちも動物だ」  
人をバカにした薄気味悪い言葉に眉を顰めつつ、明は素朴な疑問を口にする。  
「けど、眠ってる間のことをよく覚えているな」  
「そーいうのは、棺桶が記憶すんの」  
「ず、随分便利な.....」  
「貴族の棺桶は、全て特別製だ。後で見せてやる」  
「いや、別に見せてもらわなくてもいい」  
「人がせっかく見せてやろうってのに、見ねえのかよ！」  
「お前は人じゃないだろうが！」  
「あ、そっか」  
エディは「あはは」と笑って、頭を掻いた。  
「で、十年前から日本に生息してたのか？」  
「生息って言うなー」  
「それ以外なんて言うんだよ。俺が知るか」  
「まあ、その、だな」  
「ん？」  
エディはチマチマと明に近づき、彼の顔をじっと見る。  
「日本に住んで十年。お前ほど親身になって俺の世話をしてくれた人間はいなかった」  
「俺が世話をしたのはコウモリで、吸血鬼じゃねえっての」  
「しかし、そのコウモリは俺が変化したもんだから、一緒だろ？」  
「ま、まあ、そう言われれば.....」  
明は、じわじわと近寄ってくるエディに警戒しながら、ぎこちなく頷いた。  
「故郷を離れて数百年、これほど嬉しいと思ったことはなかった。お前は、優しい人間なんだな。顔も俺好みだし.....」  
「お前は、その優しくて自分好みの人間を餌にしようとしたんだぞ？」  
明の口調が、さっきより優しく感じるのは気のせいだろうか。  
「それは謝る。ここ何日か、ちゃんとメシ食ってなかったんだ。それにお前は、物凄く旨そうな匂いさせてたし、実際味見したら、すっげー旨かったし」

エディは苦笑して、明の額の傷を指先でちゃんと触った。

明は逃げない。

よっしゃ！ 情に訴えての泣き落としまで、あと一步だっ！

エディは心の中で「イエス、イエス！」と何度も繰り返し、言葉を続ける。

「俺が眠っている間に、世界はとんでもなく変わってた。……インターネットで調べたら、俺の住んでいた城は観光用のホテルに改装されてたし、渡り鳥のネットワークでも、同族の行方は分からねえそうだ。つまり俺は、人間の中にぼつんと一人ぼっち」

「……もしや、パソコンが使えるのか？」

「あんな簡単だ。すぐ覚えた」

「鳥と話ができるのか？」

「おう。鳥だけじゃねえ。動物は全部だ。みんな俺の召使いみたいなもんだから。ただし、犬はダメ、犬は俺と相性が合わねえらしくて」

「凄いな」

動物と話ができるなんて、ドリトル先生みたいじゃないか！

動物と話ができたらどんなに楽しいだろうと、誰でも子供の時に一度は思うものだ。

そんな凄いことを、エディは簡単にやってのける。

明は、相手が吸血鬼だということを忘れ、無性に羨ましくなった。

「正体を明かして名前を教えるなんて、明が初めてだ。一人ぼっちになったから寂しかったのかもな」

「エ、エディ？」

「もしお前が許してくれるなら、俺はお前とずっと一緒にいたいと思ってる」

エディは明の頬を片手でそっと撫で、寂しそうに微笑む。

「……俺の血を吸わないって約束するなら、その、考えてやっても」

綺麗な顔に迫られると、性別に関係なくドキドキしてしまう。明は、頬を赤く染めて、やっとそれだけ言った。

「ああ。明が『吸っていい』と言わない限り、俺はお前の首筋に噛み付いたりしねえ」

やったっ！ 同居オツケーッ！ 絶対に「吸っていい」って言わせてやるっ！ こんな旨い餌を放っておけるかってんだっ！ 今に見てる！

持久戦に持ち込んでも、明の血を吸いたいらしい。

エディは心の中で、歓喜の歌を歌いながら両手の拳を振り上げる。

「んじゃ、お近づきの印に」

「は？」

明は、自分が何をされるのかわからないまま押し倒された。

エディは明の上に覆い被さると、彼の唇に自分の唇を押しつける。

最初は、包み込むような優しいキス。

それから角度を変えて、徐々に激しく口づける。

「ん、んーっ！」

明はエディを押しつけようと両手を突っ張るが、彼の体はびくともしない。

近づきすぎてピントが合わないが、エディの瞳が青から深紅に変わっているのはぼんやりと見えた。

このっ！ バカ力のホモ吸血鬼っ！

言葉にできない憤りを拳に変えて、明はエディの胸を叩く。

だがエディは、離れるどころか一層激しく唇を貪った。それだけでなく、片手を明の下肢に忍ばせ、ジーンズのファスナーを下ろす。

「んっ！」

エディのひんやりとした手が、下着越しに明の雄をそっと包んだ。

「家賃の代わりに。うんと気持ちよくしてやる」

「や、やめろ……っ」

「そうやって睨んでいられるのも、今のうちだ」

布越しに扱かれ、もどかしい快感が背中を駆け上がっていく。明は腰を振り、エディの手から離れようとした。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>